

銀行検査部 25時

高任和夫



|著者|高任和夫 1946年、宮城県生まれ。東北大学法学部卒業。三井物産入社。以来、審査畑を歩み、現在は審査部次長。著書に「商社審査部25時」「四十代は男の峠」などがある。

ぎんこうけん さ ぶ じ
銀行検査部25時

たかとうかず お
高任和夫

© Kazuo Takato 1994

1994年 2月15日第1刷発行

1994年 3月22日第2刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——慶昌堂印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社上島製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。(庫)

ISBN4-06-185598-0

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

銀行検査部25時

高任和夫

目次

査問委員会 5

疑惑 37

圭子という女 51

父と息子 63

破産宣告 81

真相 103

絆 130

ブラック・メール 153

企業弁護士 182

追及 207

再会 236

辞表 262

解説 佐高信 280

単行本は一九九〇年九月 小社刊

査問委員会

1

私は後悔していた。

査問委員会に出席したことを、そして発言したことを。

どうでもいいことだった。出席せずともよかったし、義理で出たなら出たで、沈黙を守ればよかったのだ。誰に頼まれたわけでもないのに、変に力をこめて、意見を述べる必要などなかったのだ。

役員室のすぐ横の、十人も入れれば一杯になる細長い会議室に、重苦しい沈黙が垂れこめていた。私の発言のせいである。どうやら私は、査問委員会の流儀を理解していなかったらしい。

委員長は、私を含めて三人の検査部のスタッフが作ったファイル^{ぶくろ}を閉じ、下腹^{どく}れの顔をサイドテーブルの上の、金色に輝く置き時計に向けた。それから、ふっと小さな溜め息をつき、普段でもめったに表情を宿すことのない目の動きを一層隠すかのように、重たげな臉を閉じた。

ただし、いかにも意思的に固く結ばれている厚い唇の辺りには、不機嫌な気配が漂っている。呼吸に合わせて微かに動く巨体からは、得体の知れぬ熱量が放射し、他のものを圧倒する。

常連の委員たちは、みな知っている。テーブルの一番奥に鎮座している、普段は管理部門を統括している常務である委員長は、決して時間を無駄にしないことを。そしてこのように押し黙っているときは、自ら下そうとしている裁決を吟味しているのだということを。——知りつつ、そして恐れている。

この査問委員会の司会役である人事部長は、委員長の内心を推し量るべく、その顔を凝視している。企画部長は上の空で資料を指で弄もてあそんでいる。そして管理部長の児玉泰造は、二度ばかり、ちらと私に視線を投げた。表情を押し殺してはいるが、懸念していることだけは伝わった。私は部屋の中の青磁の壺や油彩に目をやった。近頃、どういふわけか、この手のものに気が引かれる。齡をとったのだろうか。まだ四十代も半ばを過ぎたばかりだというのに。

もう一度、この査問の対象者のことを考えた。私より二期下の浦和支店長である。一緒に仕事をしたことはないが、意欲的で熱意があるという評判は私も聞いている。どんどん登用して、機会を与えるべき逸材である。その齡で熱意を失わぬというだけで珍しい。私とは違う。

そのエリートが、不動産業者に引っかけた。

多額の融資をしたが、業者が地上げにしくじったため、貸し金が焦げ付いてしまったのである。

要は、未曾有みぞうの金余りのせいなのだ、と私は思っている。行きどころのない金が、海外か、株、または不動産に流れた。運用に困った銀行の金もその方面に向かった。

支店の業績を上げようと思えば、不動産業者に融資することは避けられず、必然的に貸し方も

緩くなる。止むを得ぬ事故と呼ぶべきではないか。

そのような趣旨のことを、この一時間ほどのあいだに、私は二、三度口にした。

誰にとつても、耳に心地よい議論ではなかったろう。だが、どういうわけか、私は止まらなかった。一体、どうしたのだらう。個人としては力のない銀行員を、不動産の高騰に一役買わせた仕組みが、いやに腹立たしかったのかもしれない。そう、ひよつとしたら、私は怒っているのかもしれない。まことに珍しく……。

それにしても、我ながら奇妙であった。

三年前、希望して検査部に移ったのは、一つには最前線の激務に耐えられない事情が生じたためと、もう一つは出世競争や権力闘争との関わり合いを自ら絶ちたいと願ったからである。それがいかに心臓病で入院中の部長の代理とはいえ、こうやってこれから銀行の中枢をのぼっていく人々を査問する会議に列席することになるとは、喜劇以外の何ものでもない。

「——議論は出つくしたようだ」

目をつむって五、六分後だろうか、委員長が充分に抑制した声音でいった。何の感情も混じらぬ細い目で、委員の顔の一つ一つを眺めた。

人事部長はただちにうなずき、企画部長は、まあ、ここまででしようね、と同意した。もう一人の男、管理部長は、分厚い顔の表情を消していた。

「主任検査役は——」

と委員長が私の顔を見ずに総括した。

「浦和支店のこの度の焦げ付きは、今の日本経済の構造からして、止むを得ざる面があると主張した。そう言つて支店長の勇み足を弁護した。そうだな？」

私はうなずきつつ、この権力者が、まだ部下の発言を正確に理解する能力を失っていないことを知った。聞く耳を持ち続けるといふことは、結構困難なことである。

しかし、三人の部長は、それぞれの仕草で驚きを表わした。口を開け、様子をうかがい、面を伏せた。

きつと、このような形で、委員長が意見を聞くといふことはなかったのだろう。彼が自分を抑え、部下の言葉をなぞるなどということもなかったのだろう。なぜか、これまでのやり方と流儀が違っているのだ。

「だが、金融緩和時だろうと、引き締め時だろうと、焦げ付きがあつてはならんのだな。馬鹿馬鹿しいが、当然のことだ。——それで」

委員長が、一呼吸置いて言つた。

「今日の裁決は保留にしようと思う。浦和の損害がどれほどのものになるか、二億で済むのか、十億になるのか、それが判明した時点で委員会を再開する。以上だ」

私は委員長の判断が妥当であつたと思う。その態度も総じて冷静であつたと評価したい。ただし、その席の立ち方、歩き方に、いささか凶暴なものを感じ、驚いたのも事実である。もつとも、この委員会に出たのが初めてとあつては、断定しかねるけれど……。

人事部長が足早に委員長の後を追ひ、企画部長がちらりと私を一瞥して去つたので、私は管理

部長と取り残される形になった。

「何かまずかったかな？」

と、同期入行の兎玉に訊いた。

漠然とした不安が、胸にしこりとなっている。

「いや、あれでいい。しかし……」

「しかし、なんだ？」

「おまえは、このような場には出ない方がよさそうだ」

「なぜ？」

「何やら、すぐわないんだな。……どこがどうと言っわけじゃないんだが」

「ふん……」

それは私も感じていた。それも、たつぷりと。

「それにな、おまえは気づかなかったようだが、常務は処罰したがっていたんだ」

「まさか……」

「いや、本当だ。好業績に浮かれ気味の行内を引き締めるためにな」

「冗談じゃない」

「いや、そういうことだ。経営者というのは、そのように物事を考えるものだ」

「信じられんね」

「だろうな。——おまえは、誰だって、自分と似たようにものを考えると思っている。そこが違

う。そこで躓く。氣をつけたほうがいいな」

兎玉の目に、暗い光が宿っている。私より遥かに長く権力の側にいて、権力の作用というものを見てきた男の目なのである。

肩を並べて、エレベーター・ホールへの長い廊下を歩いた。もつとも、短軀肥満の兎玉は、私より首一つ低いのだが……。

そう言えば、この委員会に出た部長たちは皆寡黙で、それもただ単に口数が少ないだけでなく、懸命に委員長の判断を読み取ろうとしていたことに気がついた。どうやら、私には似合わない世界である。

割り切ろうと心に決めた。

検査部長が回復したならば、私が査問委員会に出席することは、二度と再び有り得ないのである。心穏やかに主任検査役の地味な仕事を続けることができる。

入行以来、辛うじて今日に至るまで保っている兎玉とのか細い縁の中に、この問題が紛れこむこともないだろう。

エレベーターのボタンを押した。下りが先に来て、私は乗り込んだ。

「あ、千坂」

と、兎玉が背中に話しかけた。

「聞いているか? ——日本橋界限がひどく荒れているようだ」

「日本橋?」

意味が分からなかった。聞き直そうと思ったが、ドアが閉まった。理解したのは、もっと後になってからである。

2

電話が鳴った。

ルー、ルーと静かな検査部に鳴り響いた。

行外からである。行内だと、リン、リンと短く鳴る。

胸騒ぎがした。この電話番号を知っている人間はごく限られている。受話器を取った。

「——秀夫か？」

電話の主がいきなり切り出した。老人特有の、やや甲高いが有無を言わせぬ口調である。

長年、人に命令し、叱責することに慣れた権力者の声である。そして、私をファースト・ネームで呼べる唯一の男——仙台に住む父親であった。

「どうした？」

と、尋ねた。

職務や規律に厳格すぎるほど厳格な父親が、会社で電話を掛けてくることなど滅多にない。一番最後はいつだったろうか。不吉な予感を払い除けつつ考えた。

「腹を切ることにした」

と、父はまたも単刀直入に告げてきた。
息を呑んだ。

「――癌？」

「そうだ」

なぜか、やはり、と思った。

いつからだろう。このように、不幸が襲ってくることにについて、覚悟はできていた。時間の問題だろうと思っていた。この歳になって、幸せなことなぞ、めったに訪れるはずもない。

「間違いはない？」

ただ、念を押した。

「ないな、たつたいま、母さん同席の場で告知された」

母の、驚き、怯え、そして悲しんでいる姿が、ちらと眼に浮かんだ。ほぼ順調な人生を歩んできた母にとっては重すぎる試練である。

「初期の段階なんだろうよ、本人に告げたくらいなんだから……」
励ました。

「そう思うか？」

「思うね」

ほんの僅か、父親の心の震えが感じられる。さざ波のように伝わった。息子にだけ分かる。
「で、どこで切る？」

「黒木病院」

仙台では高名な胃腸科系の病院である。

「あそこならいいな」

異論はない。

「ただな……」

「なに？」

「入院待ちの患者が多くて、二十人とか三十人とか言っている。随分先のことになりそつだ」

「先つていつごろ？」

「二、三カ月かな」

ちと遅い。いかにもまずい。

「別の病院に変えよう」

提案した。進行するのが怖かった。前例がある。

「いや、いい」

「いいつつて……」

「いや、黒木に決めたんだ」

父は決して譲らない。

古希とは、古来稀なる頑固な老人のためにつくられた言葉である。ほぼ七十年間、思うがままに生きてきた男の考えを変えることが不可能なことは、私が最もよく知っている。

文字通り苦学力行して、ついには地方行政の頂点近い地位に就いて実権を握った男。退職し、外郭団体に身を置くものの、未だに隠然たる影響力を後輩たちに振るう男。意志が強く、頭脳明晰で、そして皮肉なことに柔道で鍛えた頑健な肉体を持つ——いや、持っていた男。

反論し、説得することは、不可能である。

分かった、と言って受話器を置こうとした。

「あ、ちよつと待て」

父が遮った。

「なに？」

「幸子に知らせたほうがいいと思うか」

珍しく、意見を求められた。

「当然、知らせるべきだろうな」

「しかし、あいつはおまえと違って薄情じゃないから、取り乱すだろうな」

父の強烈な力に庇護され、母の愛情にくるまれて育った妹である。母と同じように悲しむだろう。幸子は、いまだかつて、愛する人を理不尽な何ものかによって奪われたことがないのだ。四十をとくに越したというのに。

ことの成り行き次第によっては、父親の死を迎えるかもしれない以上、幸子にも準備する時間というものが必要だ。

「やはり、知らせるべきだろうな」

と、繰り返した。しかし、

「ふむ、……もう少し考えてみる」

と、留保された。

何でも、自分の頭で充分に咀嚼しなければ気が済まないのである。これからさまざまなことを考えるのだろう。まして、ことは自分の命にかかわる問題である。

「お好きなように……」

そう言つて、電話を切るしかなかった。

空の色が、いつしか、コバルト・ブルーに染まっている。午後の陽が次第に弱くなり、やがて夕闇が夜に変わつてゆくひととき、最も心が安らぐ。安らぎ、そして、居心地のよい虚しさを覚える。

狭い道路を挟んだ、向こう側の金融、証券、そして著名なメーカーのビルに照明が灯り、キリツとスーツを身にまとつたビジネスマン、着飾つたOLが吐き出されてゆく。銀座や新橋あたりの空が、なまめかしく明るく輝いている。そう言えば、春なのだ。

あのあたりの店に、ちよつと寄りたい浮気心がないではないが、自分の心を押し殺すことには慣れてゐる。

ウィークデイのうち、一日や二日のどうしようもない例外を除いて、私は中学三年の息子と食事する義務を自らに課している。家政婦の作ってくれた味気ない家庭料理でも、二人で食べればそんなにあましくない。